

14. 安藤忠雄(2022.01.01)談（日本経済新聞元旦号第二部）を読みつつ

「細菌やウイルスというのは目には見えないが、地球上をまだまだ覆って、人間以上に支配している。そのつながりを踏まえたうえで人間の暮らしを設計し直さないと、どんどん反逆される。もう一度、地球の生態系を考え直して、それを壊さないように人間の生産と消費というネットワークを作り上げないといかんと思います。」自然現象は、複雑な地球の運動というか存在するための活動によっているわけで、とても人間の意志で変えられるものではありません。

しかし、私たちは、どこかで横柄になり勘違いしたり、自然というものを無視して都合の良いように一方的に利用することが進化や発展だというふうになってきたような気がします。蟻が営々と積み上げてきたあり塚をいとも簡単に足蹴により破壊して、その上に座るような行為にも見えてきます。政治が科学技術に敬意を払わず、芸術文化に対する愛情がなく、ひたすら目の前の経済のことだけを考えているのにどこか通じているようです。何か起きれば、そこだけを繕って済ますという先送りの積み重ねになっているような気がします。これだけ多様で価値観が異なり、格差が生じている社会の中で、しっかりした国家ヴィジョン、といってもむずかしいのは承知してはいますが、それへの歩みがなければ退歩するだけになると思います。

未来へ向けて、命と暮らしを守るために自然のシステムを維持しながら、できることは何か、してはならないことは何かをグローバルな視点で考える必要があります。そういう意味では、われわれが常に危惧している自然災害も自然現象、自然の仕組みであるということ認識しつつ、そのバランスを還元可能な範囲で利用・活用することに注力することが重要なことです。

人間は欲張りで、目先の投資効果を考えて、さまざまな行為をしますが、自然のスケールでの評価にはいたらないというか、その能力はないと思います。つまり、自然と人間は感受性が大きく異なっていると思われれます。例えば、河川改修で堤防を築き、これまでの周辺の遊水機能を廃止して、流路規制を行うことは、確かに水路としての機能を集約したものではありませんが、本来の河川ではなくただの排水路になっているような気がします。そのために、想定以上のものがあれば、越流して浸水氾濫を起すことということになります。

人類の歴史以上に長い時間をかけて形成されてきた河川の資質は潜在化しており、それは人間の英知を超えているということ認識すべきです。特に、最近の気象の変動、開発行為による人口集中は、自然災害の巨大化を招いており、これまでの延長上の考え方を修

正しないと、最後のとどめを食らうことになってしまうのではないかと思います。自ら災害リスクを作っている行為に対して、何らかの対応をしていかないとますます大きなリスクになってしまい、手がつけられない怪物になってしまうように思われます。